



昔語質屋
 庫卷之五
 初篇



^ 13
 3394
 5



門 13
334
卷 5

森先生著

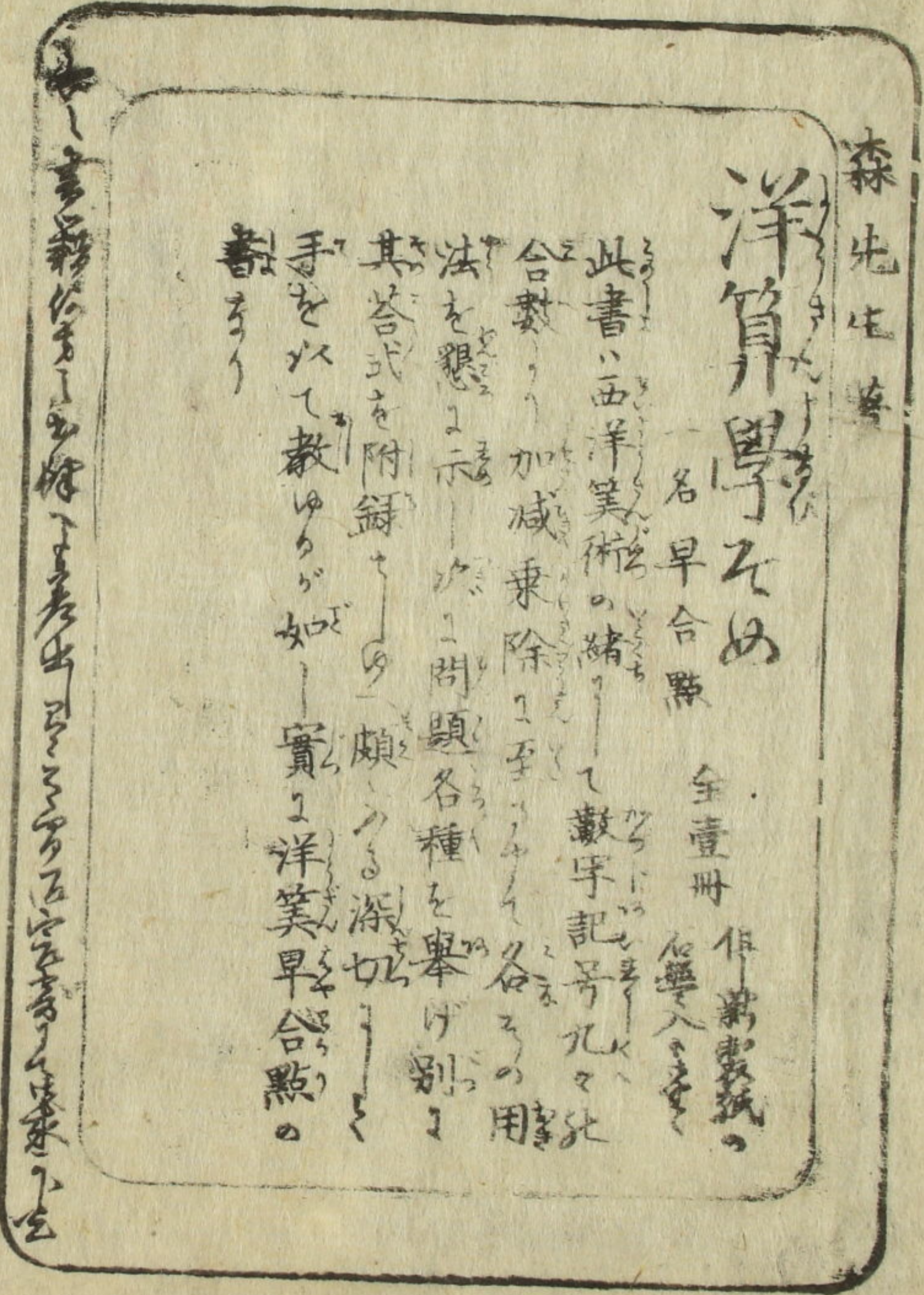
洋算學之め

名早合點

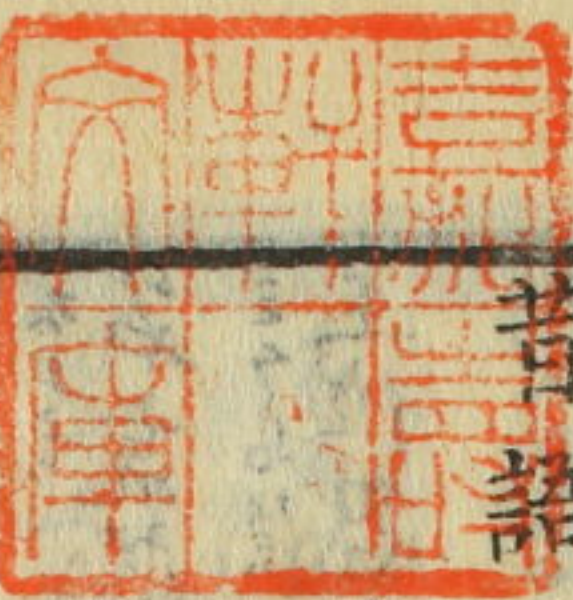
全壹冊

伴新製紙

此書は西洋算術の緒に於て、
合點、加減乗除、乃至各種の用
法を懇々示し、一問題各種を擧げ別
其答式を附録し、頗る深切に
手を以て教ゆり、如實に洋算早合點の
書なり



昔語 寶屋庫 卷之五



東都

曲亭馬

琴

第十

紀名虎錦の擯鼻禪



叔子の迹、奥ぞとの身の幅二尺五六寸。長一丈有餘。いづれも沈太く逞
し。大和錦の禪襦垂たる厚總熨まど。わたりを拂ふ意氣揚、現古
の最もあつめ。と稱噴せざるいづれも、當下錦の梳鼻ハ席上陝と
夷坐す。掌ニツ四拍鳴。妙冲善尼の世又稀ある。孝行の物わら
ぬ。哀感涙を拭ひあへど。うらあがりあめを中、独角能の向どやうの
大人氣も、もあつれん。吾ハ仁明帝のちん裁。御叔氏主を以、あひ力士
氏長が禪襦まね。もさるあめ。のありともあつら。れが。例の白徒が事を好
す。紀名虎の名を員。傳來帖さ。物。綴る。を。ま。讀む

新編 雑書

名刺の疎く。よろづ質素小きり。まきり。古書のうら。推量。又清
 和天皇降誕まじく。僅九ヶ月。後東宮小立あり。ひのり。母太政大臣
 良の女。嫡子。又惟喬親王の文德第一の皇子。小立り。
 まま。皇太子。まじり。母正四位下紀朝臣名虎が女。孝子
 ろん。惟喬の。有常の妹。名を靜と。あん。この腹。惟
 喬親王と加茂の。産。あひぬ。又彼紀名吉。朝臣の仁明
 天皇の。養和十四年。卒。まじり。四年を。加祥三年。惟仁親
 王誕生。まじり。惟喬惟仁の王位。あひの相撲人。名虎を
 まじり。作。年代。不都合。物語。又惟仁親王。方。り
 孔雀三郎。業平。の。力。作。傳奇の作者。滑。智。も
 白虎。未。雀の。對。を。たり。文德。清和の。後。の。相撲。の。とき。

皇胤紹運
 德天皇四
 子あり直
 子女王を
 惟徐親王
 の身二女
 とその下
 小或い惟
 高の女と
 住したア
 けり

綱号。たの。は。小業平の名。を負。在原の中將の紀有常
 國防權。元慶元年。丁酉。と交。加。致。と。は。有常。の。中。の。人。の。まじり。
 五月廿三日。卒。年六十三。あ。伊勢物語。小。え。め。れ。有常の。又。の。名。虎。と。業平。を。り。
 一。番。の。相。撲。と。亦。と。後。の。世。武藏國葛飾の。ほ。小業平。或。成。平。と
 相撲人あり。り。住。る。の。橋。を。業平。橋。と。喝。こ。の。土
 俗の。説。又。因。て。孔雀。の。對。業平。と。名。つ。けた。ま。の。相。撲。の。り。傳奇
 の。作者。が。筆。を。し。れ。惟喬親王の。東宮。あ。ひ。の。當。時。の
 巷説。あり。江。抄。小。天。女。皇。帝。皇。位。を。惟高親王。小。讓。ら。ん。の。志
 あり。太政大臣。忠仁。公。の。摠。天。下。の。政。を。堪。第一。の。臣。たり。憚。あ。り。口
 より。あ。の。間。漸。數。月。を。経。り。云。或。の。神。祇。は。祈。請。又。秘。法。を。傳
 して。佛。力。を。新。れ。真。淨。僧。正。小。野。親。王。の。行。師。あり。真。雅。僧。都。る。

東宮の護持僧なり。仁上原本ハ護持これらの護持より王位あらそひとりのみうり出ま
 したゆ欽とて真濟真雅の両僧を召亮業平とてあるや。あつたは貞觀の
 勅書小朕が庶兄惟喬親王ハ先皇の鍾愛あらふなり。と宣はせ推
 量とてまゝこの親王ハあんな羊も長あひて殊に帝の心愛ふまゝとせり。と
 世の入多う空位ハの君とて譲らせぬめとらひしなり。たゞあひのり
 惟仁親王誕生ましく。僅九ヶ月が経て東宮とてあひのりたれば人の口はさ
 るてよめぬ浮説ゆゆをたり。あつてもあつても推量の説られ惟喬親
 王の心より多し棄んとあせり。あつてもあつても前より列とるを
 えくもあらん。さてもあつても主となつたり。氏長ハのり二代実録巻の四十九
 の十五張と見え。実録仁壽二年の條より。五月廿八日丙午。前周防守
 後五位下紀朝臣安雄卒。安雄ハ左京の八助教後五位下種継がまゝ
 仁明天皇経術を崇めて屢儒者を兄前より引て論難せしめひん
 時又御船宿禰氏主ハ大学博士たり。種継ハ助教たり。天皇兩人を喚
 り。経義を論じぬめ。あつたは氏主礼を執らぬ種継ハ傳を擧ぐ。進學往
 復しとも折角とる。この時小當て脅け之士。左近衛門阿加根継右近
 衛門伴氏長並に相撲の最なり。天下を襲はる。帝氏主を喚く氏長
 と。種継を根継とてりてられ。我とあひぬ。と見えたり。あつたは紀種継
 が學問の力をカシ根継ははあひて帝の心愛をかり。あつたは紀名虎が相撲
 のよをいふや抑めぬめ。あつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたは
 母あつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたは
 十の北七張仁和三年秋七月廿七日戊戌の條より。天皇光紫宸殿小御し。と
 左右の相撲人の體骨強弱の秋を覽覧し。その後擇抜てその名を喚

仁明天皇経術を崇めて屢儒者を兄前より引て論難せしめひん
 時又御船宿禰氏主ハ大学博士たり。種継ハ助教たり。天皇兩人を喚
 り。経義を論じぬめ。あつたは氏主礼を執らぬ種継ハ傳を擧ぐ。進學往
 復しとも折角とる。この時小當て脅け之士。左近衛門阿加根継右近
 衛門伴氏長並に相撲の最なり。天下を襲はる。帝氏主を喚く氏長
 と。種継を根継とてりてられ。我とあひぬ。と見えたり。あつたは紀種継
 が學問の力をカシ根継ははあひて帝の心愛をかり。あつたは紀名虎が相撲
 のよをいふや抑めぬめ。あつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたは
 母あつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたはあつたは
 十の北七張仁和三年秋七月廿七日戊戌の條より。天皇光紫宸殿小御し。と
 左右の相撲人の體骨強弱の秋を覽覧し。その後擇抜てその名を喚

く。角瓶せうのあそえたり。られ今の相模取能喚出の盤鶴この餘駁
方式のれどら小勝らぬのるんぞりんとあふ誰あめ代とあつた
まらば衆皆膝の進しをあらむと共々笑坪よりりよけを。

第十一 袈裟御前苦節の鞋被

折もめれ透間漏る。裏白窓の夜風とくも小苗奇南の薫て韻郁と西
能が破凡の春の色もまきあめらぬ秀紋様の操り凡雪の似消ての後法
の水濯がく。潔紅袈裟御前が苦節の像見と名告はく。抗鼻禪席
を譲るほど小舟や小小勝をせめ。とらわが主と頼るたる美人のうへ世
の人のうへをせめあふあめらぬ。ゆよりんもとありなれど。どひとせれ一人の
あま又いざらんも真めらじいり五人の白拍子いづれ。その名を法衣と
いひ袈裟といひ禪師といひ佛といひ千手。とていひてみる救世の

菩薩るんども。その傳者略はて知り稀あり。法衣といふらるが主の袈裟御
前の母公小作り。所縁まつて。こそは眞の衣何よ住られ。衣何殿と唱
たり。盛衰記よええやり。その女児の渡り妻も。名を東といふれ
ど世の人の衣何よ因て。袈裟いすと縛号せしは亦是ある。書ある我
たるこの母子。舊の白拍子ある。あふ。高緯号と。喚れたり。何をりて。外此
ゆとあらば。源平盛衰記の中衣何が夫誰あるをいひ。と只所縁まつて。陸
奥に住するをいひ。且こそ。とて。顔色も又傳稀あり。このをいひ
かへらんと。白拍子多し。とらんも。據あふ。ゆらら。とて。袈裟御前も
母の跡を継ぐ。あふ。とらある。衆妓多し。は年才十四のころ。左衛門尉源
渡小ららんで。遂に。は。妻とあり。あふ。母の衣何を。別荘。春あふ。
てて。京。衣何のと稱たるあふ。又禪師といひ。世の人の。禪師

かて静が母あり。佛とら加賀國より京のありあがる白拍子とて平相國と思

つれ後、飽きて尼とありた千手の平重衡の囚きて鎌倉ゆきて程鎌

倉殿の仰よりて衆を慰たじは重衡終不誅せられぬとす。い

悲之歎き。衆より尼とありまじりて物なりひのうもれがりて程あり

ありありぬ。東鑑文治四年三月廿五日の條よ。この五人の白拍子の系竹をりて

世の人の拵びとありありのわらありて操貞く。見識をこし男よ

も恥ごとまよりありあられど過せありて師も發せ或は尼とありて生

涯行ひとす。或は身を殺し。夫を仏道へ引接を仏縁ありぬの

るれば世人とれは緋号あり。法衣とりの袈裟とりの禪師とりの佛とりの

千手とりのひと又一説は衣竹の穢禪師の好と仏と袈裟の後才女

ありとりのほど牽強附會の言ありべし。亦ゆの五人の白拍子の母の

実名ありぬべしれど袈裟の前の名を東にひは盛衰記に載る外に

更なる考ありゆとさればその公烈苦節。自餘四人よりまて數百年の

の今よりてその物語をすくりの侍を流さるは母のあり身を汚し

夫小代して死するは僅二八の秋られどもその名の今小滅こじ現身を殺して

仁をありぬの命長しとりのひん理あり稱ひていと有がた少女は身を亦

彼盛遠入道文覚へえま渡邊薫よと遠藤を近伯監盛光が一男。

上西門院の北面の下葛あり彼へ長谷寺の觀音の祈子あり。その母を

の袖へ着の羽をぬのりと夢えて懐妊して文覚を生み。父は六十一母は四

十三より奉たる一子とてさるくらよ。や父母を喪ひて丹波保津の

莊のや司春木二郎入道道善といふものよ養生成長隨は鉄面牛皮

遠藤氏者盛遠



源左衛門尉渡

源左衛門尉渡

耳を割る。くも愛され色衣と圓坐する夜に綾錦にまくをうらふ
 折の。急に出来る五衣蘭奢の薫り微妙くて。んるよえさめね袷被
 の。中二の町はうらねべし。られやうれの后町と。同んのも忍しければ
 る。うら観てのうらる。當一件の五衣ハ上坐又推坐。これハ玉藻
 が物やうらむと世俗よあられたる。金毛玉面九尾の狐の求衣又。こと
 ハ。衆皆あさびとえやうえと。さらもゆねとをばくみかん身ハ宮女の常
 被る。五衣とりありのるんよ。求衣と名告あつるる。こと。同んのもあつて
 あり疑る。い理。え。うらね世の小説。近衛院の女官と化玉藻前と呼
 び。九尾の狐とりありのハ。原素ら土よあねりのあり。あつる五衣を
 彼が求と名けけら。その小説の本をある。借買り。が好するらん。あつ
 ども。彼玉藻傳とりありのハ。今様の草紙。あつる。どいとゆる。うらゆと

あつて。今学集巻の中。鏡。犬追物のほ。云。昔西城は班足王あつて
 その夫人悪虐人よ過。と。王よ勸。千人の首を取。む。その後妻那
 國よ。出生。周の幽王の后と。その名を。夜奴とい。國と。滅。
 人を。惑。死。後日本よ。出生。近衛院の御宇。玉藻前と。異。と
 人を。傷。と。極。後。化。と。白狐。と。あり。人を。害。と。推。ま。
 時俗。これを。驅。んと。欲。先。走。犬。を。追。て。り。その。射。騎。を。試。ま。
 白狐。を。られ。を。知。り。て。化。と。有。と。ある。赤。禽。走。獸。その。殺。氣。よ。出。當。りの。
 立。と。う。ら。の。驚。と。と。ど。の。い。の。と。あ。故。よ。られ。を。殺。生。石。と。い。今。よ。下。野
 の。那。須。野。原。よ。あ。と。犬。追。物。の。茲。よ。始。る。但。らん。を。古。老。の。口。号。り
 聽。て。本。説。を。知。ら。と。い。い。が。も。且。く。られ。を。戒。る。の。も。原。本。ハ。漢。文。あり
 今。この。書。ハ。文。安。元。年。甲。子。六。月。下。旬。東。麓。麓。破。納。序。と。便。編。者。の

自序の皇後花園帝の御宇。將軍義政公幼少の時、當よりその
 古老の口号は聽とられ、その小説の由來久しきを推して、事の
 を推量する。七十四代の帝鳥羽院の美福門院を寵さるゝの由は
 内外の見る後宮の進退より、その世の議も多し。人の
 の恨も深し。終は保元の播乱となりぬ。それらの事と、その
 院の宮嬪玉藻前との妖怪を作し、設く。ありは鳥羽院の
 とのいふごとく。近衛院の久壽の比小ぢり、その故を、その
 又本づ、あり保元物語。卷の。小保延五年五月十八日、美福門院の
 大正藤原 御腹小皇子 近衛帝 御誕生あり。上皇 鳥羽 殊に悦ひ
 長実女 思召て、何れ春宮の立、その永治元年七月七日、三歳まで御即位
 あり。依り先帝 崇徳 帝を、新院とせしむる。云々。依り久壽二年夏
 のころより、近衛院御惱をり、まゝ七月、旬あり、や馮心せられ、事
 小く、清涼殿の庇の間に、終は七月廿三日、小隠れせられ、その
 十七、近衛院に、新院の、時を、その身、その位、復つごとくも。
 重仁親王の、一定、今度の位、即せられ、と、約、ま、そのを、その、天、の
 の諸人も、その、存、なる、妙、子、思、の外、は、美福門院の、計、ひ、は、後、白、河、院
 仁、その、時、の、四、の、宮、を、その、う、ら、統、られ、る、を、その、御、位、は、即、ま、り、し
 へ、高、れ、も、後、死、も、その、ひ、の、外、の、事、は、小、ぢ、り、と、四、の、宮、も、故、待、賢、門、院
 璋子推日納言藤原 御腹、新院と御一腹、あ、れ、が、女、院、美福の、内、の、あ、り、は、
 公実の女 其、も、継、あ、れ、が、も、美福門院の、内、の、あ、り、は、重仁親王の、位、は、即、ま、り、し、
 帝、その、を、猜、ま、ら、せ、あ、り、て、その、宮、を、女、院、に、し、ま、り、進、ら、せ、あ、り、は、法、皇、
 帝、その、内、に、や、ま、り、せ、あ、り、は、その、故、に、近、衛、院、の、世、を、其、身、に、し、ま、り、し、
 帝、その、内、に、や、ま、り、せ、あ、り、は、その、故、に、近、衛、院、の、世、を、其、身、に、し、ま、り、し、

のころより、近衛院御惱をり、まゝ七月、旬あり、や馮心せられ、事
 小く、清涼殿の庇の間に、終は七月廿三日、小隠れせられ、その
 十七、近衛院に、新院の、時を、その身、その位、復つごとくも。
 重仁親王の、一定、今度の位、即せられ、と、約、ま、そのを、その、天、の
 の諸人も、その、存、なる、妙、子、思、の外、は、美福門院の、計、ひ、は、後、白、河、院
 仁、その、時、の、四、の、宮、を、その、う、ら、統、られ、る、を、その、御、位、は、即、ま、り、し
 へ、高、れ、も、後、死、も、その、ひ、の、外、の、事、は、小、ぢ、り、と、四、の、宮、も、故、待、賢、門、院
 璋子推日納言藤原 御腹、新院と御一腹、あ、れ、が、女、院、美福の、内、の、あ、り、は、
 公実の女 其、も、継、あ、れ、が、も、美福門院の、内、の、あ、り、は、重仁親王の、位、は、即、ま、り、し、
 帝、その、を、猜、ま、ら、せ、あ、り、て、その、宮、を、女、院、に、し、ま、り、進、ら、せ、あ、り、は、法、皇、
 帝、その、内、に、や、ま、り、せ、あ、り、は、その、故、に、近、衛、院、の、世、を、其、身、に、し、ま、り、し、

新院兄誼しきりあかるといふやうなる。これよりして新院の根
 一は増らさぬゆゑに。要をうとあつたをよめべし。近衛院の美福
 門院の腹もて世を御とせし十四年。おん年僅十七歳物の怪
 ありて。俄に崩さぬひね源三位頼政卿。勅令と宣して夜み
 南殿のうらまえて呼ばる。妖怪を射つてとらふといへ。この帝のおん
 時。平家物語と。ゆえたれば。序をたまたま九尾の老狐が。玉藻前と
 の女官に化す。帝を悩ませし。陰陽頭加茂保親。小あつた
 されて。野田那須野へ赴き去る。三浦女。明上徳女。廣常。仰ぎ
 せらば。おん狐の脱りて。遂に化して石となり。その後源公頼和
 尚。下野に赴けり。狐の化して。殺生石を。築ゆたり。といふ。唐山より。

黄石望夫石。おん化石化石の。いとは。くより。物も。載。と。

是る當時の小説。あれば。信。と。思。ら。ば。證。と。思。は。れ。但。巨。石。の。怪。を。

古。の。和。漢。の。例。を。ゆ。れば。件。の。殺。生。石。も。磁。石。若。石。の。類。あ。ら。ぬ。

石。を。鬼。魅。ら。れ。よ。う。と。あ。じ。う。源。公。頼。の。説。に。ま。り。て。古。今。未。生。の。玉。藻。

前。の。よ。附。會。せ。し。ま。は。け。く。さ。ら。ぬ。ら。ぬ。と。い。ふ。と。ま。ん。や。も。あ。ら。ぬ。

一條の物語。うら美福門院のうら小比賣と。作設。する。あ。ら。ぬ。

國の怪を。并。い。ふ。と。周の。褒姒。と。唐。山。演。義。の。書。に。殷の。紂。王。

の。寵。妾。や。蘇。妲。己。の。九。尾。の。狐。の。化。な。り。て。作。れ。る。を。後。の。ゆ。み。も。褒。姒。

を。妲。己。と。白。狐。と。九。尾。の。二。字。を。被。て。ら。れ。る。三。國。傳。の。惡。狐。と。い。ふ。

夫。殷。の。紂。王。の。時。に。我。朝。近。衛。帝。の。時。に。至。り。抑。幾。千。載。

和。漢。の。年。代。あ。ら。ぬ。を。備。へ。し。不。都。合。ある。小説。と。い。ふ。

唐。山。の。書。藉。と。も。涉。獵。て。證。と。思。は。れ。九。尾。の。狐。の。瑞。獸。と。い。ふ。

俗説に狐
 の化るといふ
 陽雜俎の
 狐に化すと
 拜する
 周の玉
 褒姒と
 又人の生
 血を
 大化す

あつたの矢を
つらふ小のこ
あつたの矢を
の志の赤

鎌倉
右大臣

秋和五藻



三浦及義明

まの書
の画國

五里雲の
みまの
かたの
風この
アビ
くハ
小の
るこ
の

上総

三浦の

西の

那須野

九尾の

狐と

対極

上總及廣常



九尾妖狐の
物々しき
又、
此れは
繪本
の
人
の
こ
ら

野狐のひとり。人を盡惑し。人を残害するものあらんや。そのことより。漢
石雜志に載たんと。それより原本のまゝ引用したれば。漢文より。さざり
婦知のひよ。はえがらん。野のあり。より。やう。び。鮮。せ。ら。び。て。あ。い。り。ん。
必しもあらず。さうあるを。重出せし。と。な。ひ。ひ。も。呂氏春秋。禹の。夏。の
二十。す。く。ま。と。娶。ら。と。塗山。は。行。を。或。の。時。の。暮。と。嗣。を。失。ん。と。さ。る。
辞。と。い。ら。く。が。娶。る。必。後。あ。ら。ん。乃。白狐。の。九尾。あ。る。あり。て。禹。の。子。
ら。小。至。ま。り。禹。の。曰。白。狐。は。服。あり。九尾。は。の。證。と。い。は。し。塗山
の人。歎。て。い。ら。く。綏。く。た。る。白狐。九尾。龍。く。た。る。家室。は。成。て。我。都。悠。昌
あらん。是。は。あ。の。く。塗山。氏。の。女。を。娶。る。又。白。虎。通。は。狐。は。九尾。あ。る。と
何。を。狐。死。し。て。丘。を。首。と。し。本。を。忘。れ。さ。る。安。り。を。危。を。忘。る。を。明。せ
る。必。九尾。あ。る。の。の。何。ぞ。九。妃。の。所。を。け。れ。ば。子。孫。繁。息。あり。尾。は

か。の。く。何。ぞ。後。當。盛。る。べ。ん。を。明。さ。る。又。郭。璞。贊。小。青。丘。の。奇。獸。九
尾。の。狐。道。ある。と。た。の。翔。見。る。あ。れ。バ。列。書。を。銜。と。端。を。周。文。は。作。て。り。
夷。齊。を。標。と。す。又。王。褒。が。四。子。講。德。論。小。文。王。九尾。の。狐。は。無。く。て。東
夷。歸。し。周。武。王。白。魚。を。獲。て。諸。侯。同。辭。と。す。の。兩。條。の。潛。確。居。美。書
小。載。た。り。又。山。海。經。は。青。丘。の。山。は。獸。あり。と。す。の。状。狐。の。如。く。す。て。九。の。尾
あり。と。す。の。音。嬰。兒。の。と。す。く。人。を。食。め。ら。れ。を。食。め。ら。れ。を。食。め。ら。れ。と。注。す。の
肉。を。噉。め。ら。れ。と。す。て。妖。邪。の。氣。は。逢。ざ。ら。し。む。或。の。い。は。し。盡。と。し。盡。毒。あり。
卷。の。一。又。同。書。は。青。丘。の。國。小。狐。の。九尾。あ。る。あり。左。平。の。則
は。出。づ。端。を。さ。る。あり。卷。ノ。十。ら。れ。ら。尋。く。九尾。の。狐。の。吉。瑞。を。奉。たり。但。山
海。經。の。一。説。は。青。丘。山。の。狐。く。人。を。食。め。ら。れ。を。食。め。ら。れ。が。盡。され。と
あ。る。又。周。と。和。漢。の。小。説。は。九尾。の。狐。の。人。を。害。さ。る。を。作。出。せ。歎。さ。る。れ。る

彼人を食ふといふもの九尾の狐ありと。その状狐の如くして
 九尾ありといふ。又俗説は狐の肉を喰ふ所の彼は魅まじとて寒
 中の鮮菓まじるとあり。山海経は所云九尾の狐の身を怪侍る秋
 叶れ九尾の狐の憎むるのよあらと。古人の説ところ麒麟勿勿虞
 天録よりいふ瑞獸と。且白虎通は九尾の狐は九尾の所とい
 たり。孫繁昌は惑まじといふ。又九尾の狐が宮嬪に化す。三國又妖
 孽。國を滅し人を害するといふ。その善惡吉凶の反覆を
 了。虚実をばあがらるべし。和漢の人情異なる。只奇と好
 不祥を唱ふ。彼九尾の狐の瑞獸ををたらと。孔聖獲麟の歎差夫
 久い。又狐は首九尾。尾九尾のあり。山海経は鬼而の山は獸あり。その
 状狐のごとくして九尾九首虎の尻あり。名はけく蟹姪といふ。その音

嬰兒の如し。され人を食ふ。されらるる名ありといま。その實を去
 らる奇獸あり。され九尾の狐といふもの。一海にあり。あらが物あり
 たりと。但九尾の馬の所見あり。九尾の狐の管見あり。東鑑建久四
 年七月廿四日。横山権守時廣一疋の異馬を引。將軍頼朝を
 賢あり。その是九尾あり。前足五。是所領於路國分寺の辺に出
 の由。去五月の比告あり。依て怪れを石寄の青言上と。左近將監
 家景は仰ぎ。陸奥國外濱に放さるべし。云云。同五年六月十日。條
 下は云。横山権守時廣が歎する所の馬。真勿一流遣。その件は皇
 大連為家が家。併途中に煩あり。これを射殺した。絆則顯露を
 身は早逐電。主人は仰ぎ。尋中。その処近曾適。これを石進
 じ。とんえたり。されらる世話より。か生そとあり。過體狂弱。不具の

類多し。これを奇として損う。この人も、親て亦竹の益りあらん。亦彼玉
 藻侍といひのり。小説ある。うへへもなれ。只その小説は、父母ありてを
 考ど。九尾の蛇の瑞獸ある。うへへをあらざるもの。おひやく。發する。一竹よこ
 せ。この折る。遠寺の鐘声。幽ひ。はえて。八声の鶏。も。乱と啼。見臺
 先生耳を側。秋の夜のいと長。お。今。いと。明る。よ。迫。止まん。くと。
 推禁。い。ば。妻。が。後。よ。詰り。ある。天物の仇取。前。鎌倉時代の上。下。
 米糞上人の。食。袋。ホ。い。と。あ。お。る。び。よ。先生。よ。對ひ。吾。們。い。と。さ。る。め。
 み。あ。ら。ざ。と。い。ふ。も。又。お。ひ。あ。ら。る。も。ゆ。り。ど。あ。は。明。る。あ。い。ね。あ。え。き。
 小。の。り。と。さ。れ。い。の。送。憾。し。と。り。ら。も。よ。咳。ハ。見。臺。先生。さ。も。あ。い。ど。さ。の。
 恨。い。と。う。り。あ。れ。ども。あ。る。圓。居。を。か。り。ひ。作。と。今。骨。よ。の。と。限。る。心。か。
 ら。び。既。よ。の。席。又。列。る。の。久。米。仙人。が。墮。落。の。豎。簡。行。平。の。紀念。の。

鳥帽子狩衣。軽。大。尺。が。燈。臺。花。山。院。の。禪。衣。佐。野。源。九。衛。門。が。漸。離。
 股。卷。の。餘。の。裳。毛。奉。る。よ。違。あ。ら。じ。縦。糸。の。あ。れ。古。夜。あ。り。と。も。
 あ。か。と。あ。ら。ん。あ。い。文。吾。が。袴。も。義。太。が。股。引。も。俄。輿。夫。の。腰。巾。着。も。
 移。ぬ。前。の。杖。囊。も。漏。と。べ。う。ハ。お。の。と。天。も。明。い。と。の。あ。ひ。の。只。
 翌。の。夜。を。俟。あ。い。と。と。叮。嚀。よ。説。示。と。さ。る。有。理。と。さ。る。声。も。
 ろ。と。も。野。の。燈。燭。忽。地。よ。一。度。よ。滅。と。寂。莫。と。り。宝。樹。ハ。奇。異。
 の。思。ひ。を。あ。ら。又。翌。の。夜。と。契。と。さ。る。も。さ。る。又。馮。心。る。れ。が。溜。と。庫。
 の。内。より。出。て。舊。の。と。よ。漬。し。は。と。さ。る。外。房。小。入。り。り。

第一卷。友。切。丸。の。腰。の。ひ。を。さ。ひ。ひ。し。た。れ。が。進。書。ハ。我。初。を。め。と。あ。祐。親。入。道。
 か。い。ぢ。あ。ら。う。ま。を。さ。ひ。男。兒。の。名。ハ。千。鶴。と。い。ふ。三。歳。と。い。ふ。春。祐。親。京。都。の。左。番。累。と。さ。る。
 へ。は。あ。て。る。の。と。さ。り。て。た。れ。い。あ。や。郎。堂。と。い。ふ。兒。と。失。い。せ。し。事。ハ。源。平。盛。衰。紀。卷。十。
 ハ。は。を。さ。る。又。同。書。ハ。伊。東。九。郎。祐。兼。と。い。ふ。祐。清。祐。忠。祐。兼。同。人。異。名。と。い。ふ。り。

曲亭翁性耽著作。嘗讀有用之書，以筆于無用之書。其讀有用之書也，若無用為其為無用之書也。若有用為莊子曰：知無用而始可與言用，其善哉言也。翁善遊有無，則其書作意何淺之有。是故事取凡近而理較著，閱則亦足以慰閑寂，降睡魔。况若是編博，奪和漢故事，以辨俗說虛錯，却呈之兒戲，不自諱其論之高。他或批之曰：俗說辨下，出于謔草。上予謂不然也。設夫此

之蟠龍辨，則難以為兄，難以為弟。但其詞荒唐，而以失實者有之。故雖云味免，君子嗤笑其所發明，亦足以醒蒙昧矣。且仰述千載之毒，俯辨雅俗之殊，似一目一耳所親聞，觀之非一朝一夕著述者，是故言成燈下之戲，墨意有前史之所病，豈不以其所戲諠者小，所論辨者大乎。後世輕才諷說之徒，皆驚而其知不相及焉。昔者于令升撰集古今神祇人物變化名曰搜神記。

劉惔稱之為鬼之董狐。今吾有取于其書。亦復稱翁為小說之董狐。請海內好事者。後尤其文鄙陋。勿與世冗藉同日而論。文化七年庚午肇秋下澣。

江湖陳人魁蕾撰

鈴木武筭書

編者一稱見于印中

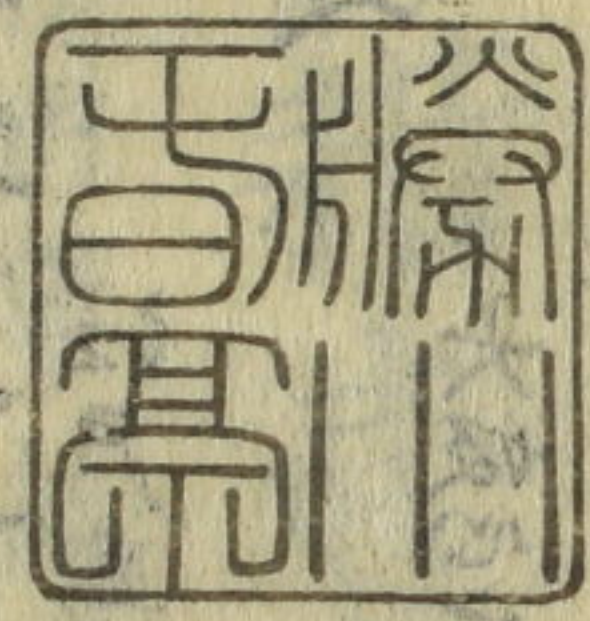
勝川

鳴岡節亭

文化庚午季夏起稿
同季秋列成



才非馬卿 野相公句
彈琴未能



春亭



鈴木武筭

○一之卷 三之卷
京都井上治兵衛
○二之卷 五之卷
大坂山崎庄九郎
○四之卷
同 市田治郎兵衛
右列人

○崇徳院天狗の爪取剪 ○鎌倉時代の上下 ○米糞上人の乞食袋
右初編總目錄中、小裁とると、その巻数既にかゝる、あるは、肇と改編の首巻小入、是より

昔語質屋庫中編五冊

初編小漏、古器小たぐひ、
故事と巻俗説と辨む、近日嗣出

同後編五冊

人間日用の衣裳器、血木小、
悉く榮枯得失の理を、
初中西編と異なり

陰騭太郎黑白論 曲亭著近列

天文地理雲雨風雷霜雪の成り、
と童蒙の爲小、
と童蒙の爲小、

著作堂 燕石雜誌 全六冊

和漢の故事と奉て俗説の根と辨し
其の考義より他物考のあり

月水 新累解脫物語 同 上 全五冊

松染 伴諸歳時記 四季詞寄 増補の注 全二冊

由亭 将画贊のあり取次 大坂公孫孫唐物所 河内屋之助

右四方の需は悉くを請ふてより次中は本居の外は物小のあり

文化七年庚午冬十一月吉日發販

綉梓書賣

江戸馬食町二丁目
大坂心齋橋筋唐物所
西村屋 共八

河内屋 共八

皇漢 西洋 翻譯

書竹藉賣弘所

并ニ學校用單語其他懸圖類地球儀及
日本暗謝地圖之類總テ學校用之書類
格別下直ニ差上候多少勿論御用向被仰付
被下度奉願候

大坂府下心齋橋通北久宝寺南二入

源

前川源七郎

